

# 奈良

# いのちの電話

# 2021 新年 第383号

## 特集 子どもの発達障害Ⅱ ～脳科学と精神分析的発達論～

石田 陽彦 氏

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

事務局／〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp



白毫寺の五色椿

うっし世に  
浄土の椿  
咲くすがた  
水原秋桜子

## 風鐸



2021年が明けた。今年こそよい年にと願わずにはいられない。

昨年は新型コロナウイルス感染症に明け暮れ、とうとうオリンピックも延期になってしまった。頻発する自然災害に加え新型コロナウイルス感染は世界中に広がり、誰もが普通の生活を送れなくなって、当たり前と思っていたことが、いかに尊いものかを思い知ることとなった。

仏教の教えに『一切皆苦』という言葉

がある。すべてが苦しみだととらえるとともに悲観的になるが、「何事も自分の思い通りにならない」ということらしい。「でも、起こることは変えられないけれども起きたことをどうとらえるかで人生はまったく変わります」と、ある僧侶の方からお聞きした。つらく苦しいことも将来の自分を成長させる糧かもしれない。だから、起きたことすべてを受け入れ、感謝していくことだと教えていただいた。

昨春、ある団体で、生活困窮家庭に直接支援物資を送る事業に参加した。申し込みがあった家庭は母子家庭が圧倒的に多かったのだが、たくさんの感謝の返信

メッセージをいただいた。その中の一つに、「今回はご支援いただいたけれども、次は私が子供と一緒に支援する側になりたいと思います」と書かれていた。つらい状況を受け入れ、なお人のことを思いやれる方って、なんてすてきな方なんだろうと胸が熱くなった。

また、「つらいけど私たちのことを思ってくれる人がいるんだということが、なにより嬉しかったです」というメッセージが多数あった。

どんなにつらくても寄り添ってくれる人は必ずいる。奈良いのちの電話は今年もそんな存在でありたい。(佳)

特別寄稿

子どもの発達障害Ⅱ

～脳科学と精神分析的発達論～

奈良いのちの電話研修委員長  
 関西大学臨床心理専門職大学院  
 教授 石田 陽彦 氏

今回は医療的診断と薬物による治療に対して、医療従事者ではない支援者は「障がい」という概念をどのように理解し、基本的にどのようにとらえてかかわっていくべきか、について筆者の考えをお話ししたいと思います。今回は、脳の成長という生理学的な側面と、まったくそれとは逆の経験主義的な解釈学である精神分析的な発達論から年齢に応じてどのように発達に特徴のある子たちを支援すべきか、を考えていきたいと思ひます。

成長・発達し知的活動も活発に行い大人になるための準備をしている時間です。そして第二性徴が始まる10歳くらいから思春期前期、つまり大人になる準備をする時期と言われています。10歳までは子どもは子どもらしく遊び、学習することによって成長し、10歳以後は、それまで以上に人と交流し、社会的な存在として適応していくことを学ぶのだと言えるかもしれません。それを脳の成長発達から見るとどうなるのでしょうか？脳はシナプスの集合です。シナプスがどれだけ多く形成されているかどうかでその後の様々な力が決まると言えるのです。

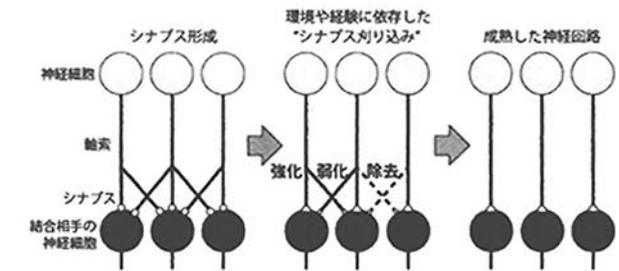


図1 生後発達期に起こる神経回路の再編成の概念図

「発達障がい」は neurodiversity (脳の多様性) の問題

これは、いろいろな神経疾患は普通のヒトゲノムの差異の結果(多様性の結果)として表れているのであって、defect(欠陥)やdisorder(障害)でないという教育的・心理的なアプローチです。「遺伝」はとても厳しい自然現象であり、もし、発達障害が遺伝による「障害」ならばその数は増えないで減少していくはずで、つまり種の保存のために「困った障害」は自然淘汰されるのが遺伝なのです。それは小脳萎縮症のような遺伝疾患を見ればわかります。しかし、発達障がい児・者が増えているという現実を見ると、遺伝的でもなく、新しい人類の新しい適応過程を示している可能性があるのかもしれませんが、のぞむ、のぞまないにかかわらずITが進歩し、シンギュラリティー理論まで生まれています。筆者はこのシンギュラリティー理論を決して肯定するものではありませんが、発達障がい児・者が「生(なま)」の対人関係より、少なからずコンピューターに親和的・適応的であると感じられている方が多いのではないのでしょうか？つまり、「発達障がい」は neurodiversity (脳の多様性) を示しており、適応しやすい対象が、複雑な感情を持つヒトより、0と1の組み合わせですべてを計算しようとするコンピューターのほうに近い時期があり、それは他の人たちと結論への導き方が少しちがうだけ、という理解が成り立つのです。

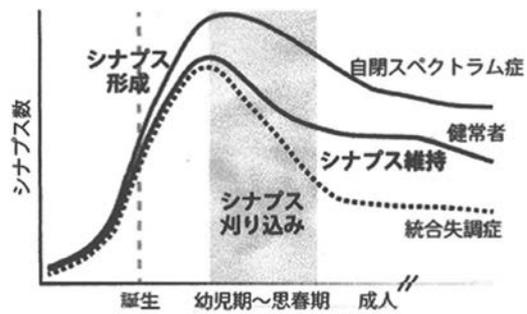


図2 ヒト大脳皮質におけるシナプス数の発達変化と精神疾患患者でみられるその異常

\*シンギュラリティー理論…唯物論からきている考えで、人間の思考も脳の中のニューロンの状態に過ぎず、物質から思考を生み出すことができる、つまりAIが人間の知性を超えることができるという理論。

シナプスのブルーミング

精神分析的な発達論では、おおよそ10歳までは前思春期、つまり子どもが子どもとして生活しヒトとして飛躍的に

シナプスは3歳までにその量的ピークを迎えます。3歳までにその子の頭の良さが決まる、と言われてきた「3歳児神話」が語り継がれてきたことも、この様に脳生理学が裏付けています。その後、シナプスのブルーミングという現象が始まります。ブルーミングというのは日本語では「刈り込み」と訳されます。つまり、成長とともに3歳までどんどん増えてきたシナプスが刈り込まれていくのです。早くも3歳で、ヒトがその後生きていく上で必要な神経細胞であるシナプスが最大値になります。そして、不要なシナプスが刈り込まれる。つまり新しい認知機能を支えるために、不要なシナプスの枝葉が整理整頓されていくのです。よくたとえられる

のは日本庭園で庭師が木々の手入れをするのに無駄な枝を刈り込み全体のバランスを保とうとする姿です。まさに、ヒトとして適応的に生きていくためにシナプスが整理整頓されていくのです。そして10歳のころにブルーミングが最終段階を迎えます。図1をご覧ください。成長とともに形成されたシナプスがブルーミングされ、整理整頓されるイメージ図です。図2は10歳前後でブルーミングの最終段階を迎えて安定期に入っていく図です。

### 脳生理学と精神分析的な発達論

そして、これら最近の脳生理学が示す脳の成長・発達過程によって生じる実際のヒトの行動面については、実は精神分析的な発達論上ですでに語られつづけて来ていたことなのです。経験主義的な解釈学である精神分析的な発達論の正しさを最近の脳生理学が証明しているに過ぎないのです。「過ぎない」という失礼な表現かもしれませんが、実際脳が示すこれらの「多様性」の修正には脳生理学的アプローチではまだどのような解決手段があるか見つけられていないのです。つまり問題点はわかるが修正できていない、のです。脳外科的手術による治療的やすべもありませんし、投薬も症状への対症療法であって根治療法薬ではないのです。ならば何が大切なのでしょうか。脳生理学から導かれたこれらの結果と、精神分析的な研究から導かれてきた莫大な実践を統合して子どもの成長にとって一番良い選択をすることではないでしょうか？最近、「脳科学者」という脳を解剖したこともない得体の知らない人たちがTVで話していることは、ほとんどこれまで精神分析的な経験科学が語ってきたことの焼き直しにしか過ぎないのです。

巷では、小さいうちから「**適応的な子ども＝大人にとって都合がよい子**」に育てるためにこのようなシナプスの形成論とブルーミング、精神分析的な発達論を全く知らない素人の人たちが、まるでクックブックのようにSST（ソーシャルスキルトレーニング）のような訓練を場当たりにプログラムして実施し、育てやすくなったと感謝されお金儲けをしている施設が大繁盛しているのが現状です。このようなことは精神分析的にも脳生理学的にも好ましい方法ではないのです。なぜならシナプス生成が最大量を迎え、**適切なブルーミングが始まる前の幼いうちからSSTを実施することは、健常児より早期にシナプスの刈り込みを行うことで、このようにして生まれた「大人にとって都合の良い子」たちは成長後に、自尊心の欠如や自己効力感のなさ、意欲低下を引き起こしている、つまり10歳までは、SSTを行うことより、もっと大切にすべきことがあります。**彼らが青年期に至り、時には精神疾患に罹患しかねないそのことを、幼少時期から青年期まで彼らの成長を追っている筆者らは知っているからです。

引用文献 図1・2 生化学 第88巻第5号 pp621-629 (2016) 生後発達の脳におけるシナプスの刈り込みメカニズム 渡邊貴樹, 上坂直史, 狩野野伸

参考文献 自閉症の世界 スティーブ・シルバーマン著 正高信男訳 講談社 2014

シンギュラリティー論を看破する為に読んで頂きたい本は、ドイツの哲学者マルクス・ガブリエル氏の「なぜ世界は存在しないのか」(講談社)です。

### 多様性の時代に

## つながり ③

### —「ありがとう」「おかげさまで」—

社会福祉法人 奈良県社会福祉協議会 理事  
喜多 俊幸

皆様には新しい年を迎えられ、初日の出に手を合わせ、神棚やご仏前を荘厳し、家族うち揃いお節をいただき、年賀状に目を通しながら知友の消息を思い、「人のつながり」に心温められていることでしょう。

私たちは、日常、家族や近所の人、友人や職場の人など、社会生活での多くの人とのつながり、親祖先との時代を超えてのつながり、自然環境の恩恵を受けての「つながり」によって生きています。例えば、「同じ社会」に生きるつながりです。「つながりを絶やさない社会づくり」をテーマに、赤い羽根共同募金運動が行われています。

「困った時はお互いさま」の精神から始まったこの運動も今年で74回の歴史を数えています。私もこの運動にかかわらせていただき、早朝駅前募金をお願いしました。特に新型コロナウイルス感染症の不安の中での活動でしたが、日常的に誰かとつながっていること、誰かを支えたり支えられたりしていること、そうしたことの大切さを改めて気づかされます。

次に、「親祖先や先人たちとの、時代を超えた」つながりです。現役教員の時“生きる”という授業をしたことがあります。“手のひらを太陽に…”という音楽とともに生徒達は一斉に手を空に向かって大きく広げ、脈々と流れる血潮に感動し、祖父母から父母へ、父母から自分へと伝わる生命のつながりを感じて、自分の命の尊さ大切さを実感しました。同時に、多くの人とのさまざまながりの中で生かされていることに気づき、「生きる力」を育むことができました。

さらに「自然」とのつながりです。間もなくすると、冬の寒さが和らぎ草木には新芽が吹いて、花のつぼみも膨らみを増していく季節。そこには、自然とのつながりを感じ、私たちのいのちは自然の働きに支えられていることに気付くでしょう。この自然環境は、人間だけでなく多くの動植物のいのちを育みます。そこには、他の動物のいのちをいただくことで自分のいのちを育てているという「つながり」があります。私たちは食前に手を合わせ「いただきます」と唱和させていただくのです。

私たちはさまざまな「つながり」の中で生かされて生きていることを思い、「ありがとう」「おかげさまで」という謙虚で感謝の暮らしをしたいものです。

(協会子育て支援委員)